

■ (3) 『舞姫』にみる新聞利用

日曜日には4ページの「読書面」がありますが、10月2日と9日の「よみたい古典」の欄で、鴎外の「舞姫」が取り上げられていました。「舞姫」は鴎外の処女小説で、この小説の後半部分にN I Eの目から見逃せない箇所がありますので紹介します。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。それをいかにと言ふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸にしくはなからむ。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるもの多きを、余は通信員になりし日より、かつて大学にしげく通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。(ちくま日本文学全集「森鴎外」より。ルビは省略)

後半部分の「かつて」以下を口語に直します。

「かつて大学に熱心に通っていた頃に鍛えた洞察力をもって、繰り返し読んだり書き写したりするうちに、今まではある専門の一つのことにとらわれていた知識がいつの間にか、総合的なもの、幅の広いものとなり、同郷の仲間のまったくおよばないほどにまで高められました。(留学生) 仲間にはドイツの新聞の社説すら読まないものがあるというのに。」踊り子エリスとの恋愛物語は虚構の部分がありますが、鴎外が新聞を読むことから学んだことは確かで、『舞姫』はN I Eを進めるうえで大切なことを教えています。

(鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問)